心癒やす居場所必要

仮設に暮らして　大震災から2年

5　子どもたち

日が落ちかけた午後4時すぎ、気仙沼市西部の高台にある五右衛門ケ原運動場仮設住宅に、スクールバスが到着した。市中心部から15分。バスを降りた子どもたち十数人は、真っすぐ自分の仮設住宅に向かう。

気仙沼小4年の小野才門君(10)もその一人。部屋では、もっぱらゲーム機で遊んだり宿題をしたりして過ごす。

震災前の自宅は学校から歩いて15分ほどの距離だった。「家に帰ると、学校の友達と近くの公園でサッカーをしたり縄跳びをしたりして毎日遊んでいたよ」と小野君。友達とは離れ離れの仮設住宅に暮らす。気軽に行き来ができなくなった。

近くに公園もない。仮設住宅の駐車場は車の行き来も多く危険だ。「遊びたくても場所がない」。寒さが厳しい冬になって外を駆け回ることはほとんどなくなった。

バスでの通学や遊び場不足で子どもたちが体を動かす機会は大幅に減ったまま。「言葉にならない思いをため込んではいないか。後で影響が出なければいいが…」。母親たちの不安は消えない。

被災地では、子どもたちに落ち着いて勉強できる時間を提供しようと、集会所での出前授業といった学習支援活動が続いている。学びの場は、子どもたちにとって貴重な居場所ともなる。

「錯角ってどこの角度が同じなんだっけ？」

「Zの形になっているところが等しいんだよ」

「Zっていえば…ももクロだよね」

仙台市で学習支援に取り組むNPO法人アスイク(仙台市)が2月28日、若林区伊在の仮設住宅で開いた学習会。問題集を解く中学生から明るい笑い声が上がった。

講師はボランティアの大学生ら。七郷中2年の佐藤理子さん(14)は1年半前から学習会に参加している。「年齢が近く話し掛けやすい。1人で勉強するより楽しいし、はかどる」と話す。

学校や家庭の環境が変わり、見えないストレスを抱える子どもたちは少なくない。講師を務める東北大大学院2年の井原拓真さん(24)は、授業が中断しても雑談の時間も大切にしている。

「話すことで発散したり、気持ちが整理できたりする。時には話を聞いてあげる姿勢も必要なんです」

アスイクの学習会で大学生の指導を受け、勉強する女子中学生たち

震災から2年となり、一見落ち着きを取り戻している子どもたち。悩みは変化を続けている。

子どもの電話相談に応じているNPO法人チャイルドラインみやぎ（仙台市）によると、震災後、減少を続けていた人間関係やいじめの相談が、昨年夏以降、再び増加に転じた。全国平均に比べて、「怒り」や「いら立ち」を訴える相談が多いのも特徴だ。

阪神大震災では、心のケアが必要な子どもの数は3年後にピークに達したとのデータもある。

同法人代表の小林純子さん(62)は「我慢や気疲れの多い暮らしが長く続いている影響も考えられる。居場所をつくり、悩みを打ち明けたり、変化を周囲が敏感に感じ取れたりする仕組みが必要だ」と指摘している。

花巻市発注工事 入札妨害

加重収賄容疑 職員

花巻市発注工事をめぐる競売入札妨害事件で、岩手県警捜査2課と花巻署は6日、加重収賄と競売入札妨害の疑いで、花巻市上水道課副主任佐々木和美容疑者(38)＝同市星が丘1丁目＝を、贈賄と競売入札妨害の疑い で、同市円万寺の建設会社「たかしん興業」元副社長高橋真也容疑者(35)＝同市天下田＝をそれぞれ再逮捕した。

佐々木容疑者の再逮捕容疑は同市下水道課勤務だった2012年3月中旬、同月27日の花巻公共